

近藤清石著
山口縣史畧

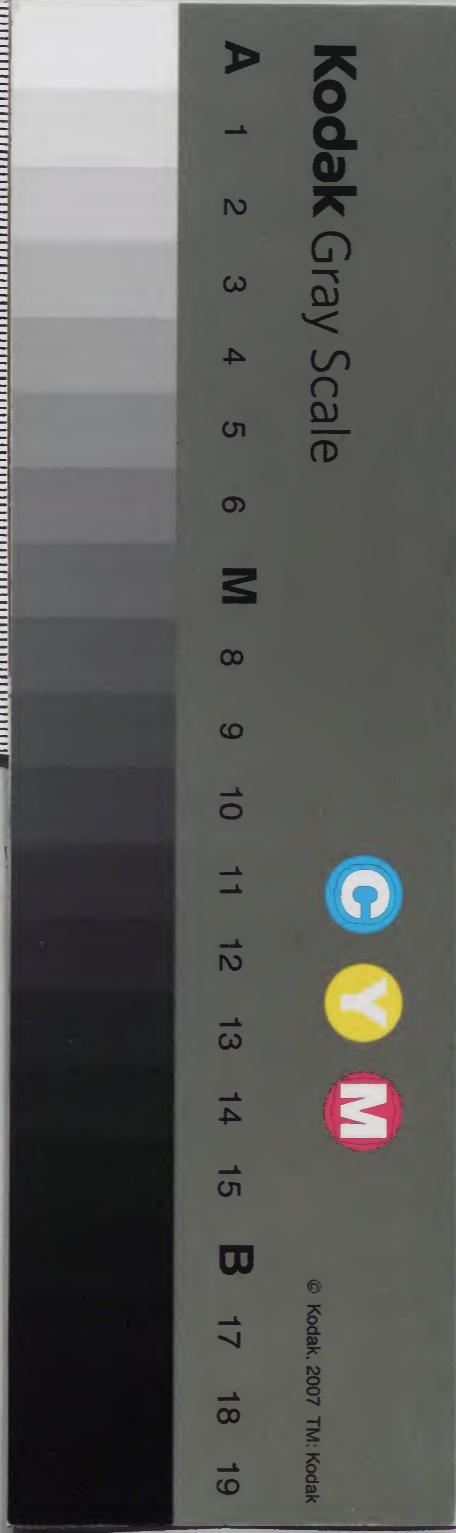
周防國之中二

農商務省
和圖書
第二六三七號
共三冊

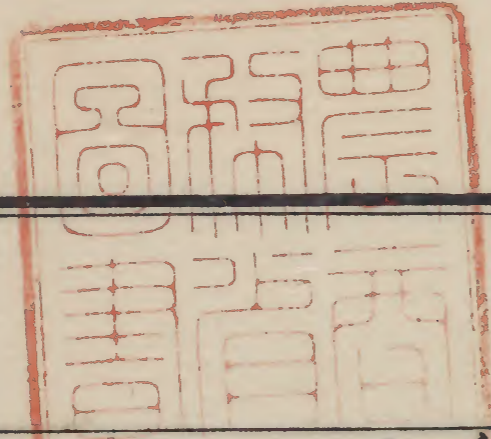
和書門
八四二二
二二七
六八五
類號函架冊

内閣文庫

函架冊	六冊
番號	和 8427
冊數	6 (2)
函號	140 304



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



德山藩毛利氏略系

毛利輝元二男

○就隆

百助 三次郎 日向守
從五位下
延寶七年八月八日卒于江戸七十八

○元賢

初元隆 元丸 式部 日向守
從五位下
元禄三年五月二十一日卒于江戸二

○元次

龜之助 永井主計 飛彈守
從五位下
實元賢弟
享保四年十一月十九日卒于江戸五

山
系
史
略
卷之三

博古堂藏

元堯

初就清龜次郎百次郎
享保四年五月二十八日卒于江戶二十歲

廣豐

初廣房三次郎但馬守山城守
從五位下
實元堯弟
安永二年十月二十九日卒六十六歲

廣寬

初豐長求馬志摩守
從五位下
寶曆八年四月八日家督
明和九年二月二十六日卒于江戶三十歲

就馴

專之助大和守石見守
左兵衛佐
從五位下
實廣寬弟
文政十一年三月二十日卒七十九歲

就壽

後廣鎮德太郎兵庫頭大和守
日向守兵庫頭

寬政九年九月二十四日家督

元蕃

初就軌廣篤德太郎山城守
淡路守
天保七年十一月五日家督

元切

平六郎實毛利元敏弟

岩國藩吉川氏略系

毛利元就二男

元春

少輔次郎治部少輔駿河守
從四位下
安藝國山縣郡新庄日山城主吉川治
部少輔興經養子天文十八年家督

山口縣史

卷之二

博古堂藏

元長

天正十四年十一月十五日卒于豐前
小倉五十七歲
初元資 崔壽丸 少輔次郎

廣家

治正十年六月五日卒于日向國四十歲
初經言 藏人頭 侍從
從四位下 如魚

廣正

寬永二年九月二十一日卒六十五歲
又次郎 左介 美濃守 内藏助
元和元年六月二十五日家督

廣嘉

寬文三年八月二十八日家督
初廣佳、廣純 長松丸 左馬助
監物
延寶七年八月十六日卒于萩五十九歲

廣紀

初廣猶 長熊 内藏助
元祿九年七月十三日卒于萩三十九歲

廣達

勝之助
正徳五年六月十九日卒于江戶二十

經永

龜次郎 左京
明和元年十月七日卒五十一歲
初豐房、永貞 吉五郎 監物 衡山

經倫

實毛利廣豐九男
享和三年九月七日卒五十八歲

經忠

初經通 和三郎
寬政四年十月二十六日家督
享和三年五月二十日卒三十八歲

經賢

初忠進 寬三郎
文化四年正月十日卒十七歲

○經禮

初賢好幸之助 監物
實經賢身 天保七年十二月十日卒四十五歲

○經章

初賢章 尚五郎
實經禮身 天保十四年十二月七日卒五十歲

○經幹

初章貞 龜之進 監物 駿河守
從五位下 明治二年三月二十日卒四十一歲

○經健

芳之助 駿河守
從五位 明治元年十二月二十八日家督

重吉

為京家毛利敬親猶子

山口縣史畧卷第二

山口縣士族 近藤清石 著

周防國之中

紀元二千百廿年

正親町天皇永祿三年正月元就隆元御即位

料ヲ獻ス。國清寺住職立雪惠心本山東福

寺ニ往來シ。京師ノ事情ニ熟スルヲ以テ。

元就父子ノ依頼スル所トナリテ東上シ。

之ヲ進納ス。天皇御扇ヲ惠心ニ賜フ。コレ

ヨリ惠心玉座ニ咫尺スル丁ヲ得テ。後遂

紀元二千二百二年

ニ大照佛智國師ノ號ヲ辱クセリ。

古文書
寺社證

文潮音寺
所藏御扇

五年十二月隆元安藝ヨリ下リ岩國ニ居ル。是ヨリ先キ大内義長ノ長門ノ且山城ニ奔ルヤ。援ヲ其兄大友義鎮ニ乞フ。初ノ義長ノ大内氏ノ後ヲ襲ク。義鎮之ヲ不可トス。義長用井ス。義鎮之ヲ含ミ。且ツ之ヲ援クル。毛利氏ト兵ノ結レテ解ケサランヲ慮リ。其乞ヲ許サス。義長死スルノ後反

紀元二千二百二年

テ毛利氏ト交誼ヲ約セシカ。大内氏以來豐前國門司城ノ長門ニ屬スルヲ以テ之ヲ取ラン。欲シ。永祿三年ニ至リ兵ヲ出シテ門司ヲ攻ム。翌年敗レテ豊後ニ引還ル。是ニ至リ復兵ヲ出シ門司ヲ攻ムルヲ以テ之ヲ指揮スヘキカ爲メニ下向セリ。

古文書

六年二月。是ヨリ先キ將軍足利義輝ノ旨ヲ以テ父我通具豊後ニ下リ。聖護院道増

紀元五百廿九年

安藝ニ下リ。豐藝ノ間ヲ調停ス。是ニ至テ
 和議成ル。上同五月十六日。隆元本國及ヒ長
 門國守護職ヲ兼ヌ。上同七月。隆元道増ヲ岩
 國ニ招キ之ヲ饗シ。鞍馬及ヒ物若干ヲ贈
 ル。上同廿四日。隆元岩國ヲ發シ安藝ニ還ル。
上同八月四日卒ス。常榮寺家譜
 十二年四月廿七日。元就安藝ヨリ防府ニ
 來ル。留ル日數日ニシテ長府ニ下向ス。古文書
 七月。豐後兵來リ本國沿海ノ地ヲ侵ス。

上同八月。小方隆忠兵部丞長府ヨリ來リ道前
熊毛郡ヲ守衛ス。上同九月。井上就貞善兵衛尉信
 常太尉兵衛尉就行長府ヨリ來リ山口ヲ守衛
上同十二日。大内輝弘太尉左衛門尉豐後兵ヲ帥
 井。吉敷郡秋穂ニ至リ。白松南北岐波床波
 等ノ土人ヲ誘ヒ。山口ニ進入スルノ警報
 至ル。是ニ於テ就行小郡ニ。就貞平野ニ斥
 候ス。就貞系根峠ニ抵リ輝弘ノ入ルニ遇
 フ。力戰シテ之ニ死ス。古文書井上家譜輝弘進シ

テ山口ニ入り、築山ニ陣シ、高嶺城ヲ攻メ、
 城麓ヲ火ク、時ニ高嶺城督市川經好伊豆守、
 九州ニ從軍シテ家ニ在ラス、其妻市川大
 家僕ヲ率井城ニ嬰リテ防禦ス。古文書、市川家
譜輝弘ハ大内氏ノ庶孽ナリ、國滅ニ先ク
 子テ流浪シ、大友義鎮ニ寄食ス、寒微知ル
 者ナシ、是ニ至リ、一隊ノ主將トナリ、忽チ
 山口ヲ取ルヲ以テ、意滿チ志驕リ、肯テ力
 ヲ出シテ高嶺ヲ攻ノス、只大内氏ノ舊臣

ノ來屬スルヲ竝チ、側ラ山口市街ノ富家
 ヲ點檢シテ軍費ヲ課ス、是ニ於テ無頼ノ
 徒輝弘ノ名ヲ銜賣シテ横行シ、往々火ヲ
 放チ其ノ財産ヲ掠奪ス、仁壁神社其災ニ
 罹ル。古文書、風土註、進案、攝山遺事高嶺城急ヲ長府及ヒ
 石見ノ吉見氏ニ告ク、吉見兵先ツ至リ宮
 野ニ戰フ。古文書廿一日、元就吉川元春及ヒ
 福原貞俊ヲ將トシ、軍ヲ返シテ輝弘ヲ討
 ツ。廿四日、元春貞俊白松南北木波床波ノ

山口縣史

卷之二

賊ヲ誅ス。上同是ヨリ先キ玖珂郡山代五箇
 村ノ土人蜂起シ。山代地鎮撫兒玉就光前豐
 守カ砦ヲ圍ム。是日佐波郡右田嶽ノ城兵
 山代ニ抵リ。就光ヲ援ケテ之ヲ敗ル。上同
 ■日。是ヨリ先キ輝弘高嶺城ヲ攻テ拔ケ
 ス。大内氏ノ舊臣モ亦來屬スル者ナキヲ
 以テ意頗ル沮ム。既ニシテ元就軍ヲ返シ
 テ來擊ツト聞キ。蒼皇山口ヲ棄テ秋穂ニ
 奔リ豐後ニ遁レントス。土人ノ遮ル所ト

紀元二千五百二年
 紀元二千五百二年

ナリ。海ニ沿ヒ濟リヲ求メテ佐波郡ニ出
 ツ。右田嶽城兵ヲ出シテ之ヲ擊ツ。輝弘富
 海浦ニ走ル。是時安藝ヨリ高嶺ニ赴援ス
 ル兵來リ都濃郡椿峠ニ在リ。背後ノ追兵
 モ亦逼ル。輝弘進退谷マリ遂ニ浮野ノ茶
 臼山ニ自及ス。上同
 元龜二年六月十四日。元就安藝ニ卒ス。洞春
 寺嫡孫輝元嗣ク。江氏家譜
 天正六年。高嶺城督市川經好輝元ニ播磨

山口縣史

卷之二

五

博古堂藏

ノ上月ニ從軍ス。内藤元輔即七止リ守ル。

經好男元教少輔七郎ヲ留メ。元輔ニ副フ。元教

反ス。元輔雜賀隆和紀伊守隆利刑部丞等ト元

教ヲ攻メテ之ヲ捕ヘ。變ヲ上月ニ報ス。經

好歸城シ元教ニ死ヲ命ス。築山ニ自盡ス。

古文 元教ノ墓及ヒ其采馬ノ塚築山ニ在

リ。温古私記ニ。少輔七郎果候以後。山

口市ノ中ノ者ニ七魂付候テ物ニ狂ヒ候ニ

付。真ノ少輔七郎十ラハ。米女ノ山郭公ト

云フ所ノ小鞆ノ手常、御自慢ニテ候。御

打候ヘトテ小鞆ヲ渡シ候ヘハ。成程ヨリ

打タル由候トアリ。今モ猶山口ノ土人采

女小督田村ノ三謠ヲ謠ハス。米女ハ市川

ノ元教ニ嫌ヒ。小督田村ハ大内氏没落當日

ノ謠ニテ之ヲ忌ムト云フ。

紀元二百五十八年 後陽成天皇天正十六年正月。是ヨリ先キ肥

後土寇蜂起シ熊本城ヲ圍ム。豐臣秀吉小

早川隆景ニ命シ之ヲ討ツ。コヽニ至テ又

輝元ニ出陣ヲ命ス。因テ輝元山口ニ出テ。

吉川經言後廣家ヲ改ム先鋒トシ。雲伯ノ兵ヲ

附シテ九州ニ差遣ス。尋テ輝元小倉ニ濟

ル。古文 十八年。輝元豐臣秀吉ノ命ヲ以テ分國ヲ

山口縣史

卷之二

檢地ス本國八ツ成ニテ十六萬二千五百八十石ナリ。福原氏文書

紀元五百五十八年

慶長元年輝元養男秀元ヲ山口ニ封ス。古文書

書

紀元五百五十八年

三年九月玉祖神社火ク。一宮社傳記

紀元五百五十八年

五年豐臣氏ノ奉行石田三成大老徳川家康ヲ撃ントス。秀頼ノ旨ヲ以テ秀吉遺言スル所ノ諸族ヲ徵ス。輝元東上シ大坂城ヲ守衛シ且ツ兵ヲ分遣シ敵城ヲ攻ム。既

ニシテ三成關原ニ敗レテ斬ラル。徳川氏

輝元ノ所領安藝備後伯耆出雲隱岐石見

及ヒ備中ノ内四萬石ノ地ヲ削奪シ防長

二國ヲ輝元秀就ニ與フ。古文書江氏家譜關原事十二

月。兼重元續和泉守。蔵田元連與三兵衛尉ニ命シ

兩國ヲ檢地ス。兩國石高二十九萬八千四

百八十石二斗三合ニテ本國ノ石高十六

萬四千四百二十石二斗壹升二合ナリ。内

玖珂郡ニテ三萬石ヲ割キ吉川廣家ノ采

紀元五百五十年

紀元五百五十四年

地ト入。古文書。檢地帳。石高書。拔。秀元ノ封ヲ長門豊浦

ニ移ス。同上。百二十石。百二十石。百二十石。

八年十月四日。輝元伏見ヨリ始メテ吉敷

郡ニ至リ。宇野令糸米ノ覺香寺ニ居ル。江氏

家譜。井原元歳。覺書。佐世元嘉長門ヲ以テ高嶺城ヲ

守ラシメ。長門國阿武郡萩ニ赴ク。留ル丁

數日。城地ヲ相シテ還ル。是ヨリ屢々萩ニ

赴ク。古文書。輝元都濃郡ニテ古帳三萬五千石ノ

九年。輝元都濃郡ニテ古帳三萬五千石ノ

地ヲ割キ。二子就隆ニ與フ。柿並年表。八月六日。

輝元伏見ニ上ル。閏八月。伏見ヨリ至ル。江氏

家譜。新譜。雜彙。十一月十一日。萩城ニ移ル。江氏家譜。

十年。吉敷郡上宇野令多賀神社境内ニ大

内義隆ノ靈社ヲ創建シ。寶現靈社ト名ツ

ク。之ニ殉難ノ士。及ヒ二条良豊。持明院基

規ノ靈ヲ合祀ス。兼山社傳記。七月。挂元綱三郎兵衛

尉。三上元忠平左衛門尉輝元ノ命ヲ以テ。天野

元信。及ヒ其子與吉。會藏等ヲ山口ニ誅ス。

紀元五百五十年

紀元五百五十九年

事長門ノ部古文書天
野家記

十一年吉敷郡上宇野令香積寺ヲ毀テ其

材ヲ斫ニ移シ洞春寺ヲ建ツ香積寺ハ大

内義弘ノ菩提院ナリ今ノ瑞光寺ノ

チ香積寺ノ遺物瑞光寺ハ元祿

元年仁保郷ヨリ移ス所ナリ

十四年玉祖神社ヲ再建ス社傳十月廿四

日桂元綱高嶺城城督トナル古文書

十五年防長檢地成ル本國現檢高三十九

紀元五百五十九年

紀元五百五十九年

紀元五百五十九年

萬六千四十石七斗壹升八合内三萬石毛

利就隆四萬五千石吉川廣家ノ采地ナリ

十六年七月廿七日致珂郡大竹川洪水隄

ヲ崩シ和木村ニ決スコレヲ新川ト名ツ

ク致珂郡誌是年毛利就隆始メテ江戸ニ赴ク

後水尾天皇慶長十九年吉川廣家老ス系圖

表年十一月毛利就隆輝元ニ大坂ニ從軍ス

紀元五百五十九年

山口縣史

卷之二

聖王百七十五年

德川氏後藤左門飛彈守ヲ輝元ニ預
 輝元之ヲ山口ニ置キ三上元友平兵衛尉等
 ニ命シテ監護セシム元友當直ノ日左門
 自殺ス元友因テ屠腹其ノ怠慢ヲ謝ス三上
家譜 元和元年六月高嶺城ヲ壞ツ幕府諸族ニ
 居城外ノ城砦ヲ廢スヘキノ令ヲ布クヲ
 以テナリ古文書十月十九日内藤元珍孫
衛門尉輝元ノ内旨ヲ以テ佐波郡富海村龍

谷寺ニ自裁ス家僕二人都濃半右衛門之
 ニ殉ス是ヨリ先キ元珍カ父元盛修理本
 國ヲ出奔シ姓名ヲ佐野道可ト變シ大坂
 ニ籠城ス城陥リテ五月廿一日山城大藪
 村鷲尾寺ニ自殺ス德川氏元珍及ヒ其弟
 粟屋元豊圖書ヲ疑ヒ之ヲ輝元ニ質ス因テ
 七月九日元珍元豊及ヒ其弟妹等ヲ京師
 ニ上ス既ニシテ元珍等德川氏ノ免ス所
 トナリテ歸ル上關ニ至ル輝元之ヲ福原

紀元五百十七年

廣俊越後守預ケ龍谷寺ニ置ク事既ニ解
 トイヘ氏猶嫌忌ニ涉ルヲ以テ遂ニ之ニ
 及ヘリ元豐ハ美禰郡ニ死ス内藤家譜美禰郡風土註
 三年四月廿八日輝元改メテ毛利就隆ヲ
 都濃郡降松莊ニ封ス三末年表六月將軍秀忠
 上洛ス就隆輝元ニ代リ預參ス新撰雜彙八月
 石見津和野城主坂崎出羽守出走佐波郡
 ニ來リ三田尻ヨリ衆船ス津和野滞在ノ

紀元五百十七年

幕吏馬井右京進小笠原市左衛門柳生又右衛門急使ヲ馳セ三
 田尻代官ニ之ヲ抑留シ津和野ニ還スヘ
 キヲ囑ス代官香川景貞左衛門坂崎主從ヲ
 追ヒ都濃郡笠戸ニテ之ニ及ヒ相俱シテ
 還ル輝元物頭二員ヲ差シ坂崎主從三人
 ヲ津和野ニ送致ス故事年表井上家譜
 八年二月輝元都濃郡長穗村龍文寺住職
 昌奕ニ豊臣太閤ノ畫像ヲ附與シ之ヲ祀
 ラシム爲メニ殿司侍者ノ二寮ヲ新建シ

山口縣史

卷之二

十一

博古堂藏

紀元千三百五十五年

殿司寮ヲ以テ靈殿ニ充テ侍者寮ヲ以テ
 其饌供所ニ充ツ。故事年表
 寛永二年六月十一日村上元重太兵衛ニ死
 ヲ賜フ。初メ其死ヲ賜ハントスル。元重ノ
 驍雄ニシテ一族知音頗ル多キ。或ハ命ヲ
 拒ミテ城下ヲ騷カサシメテ憚ル。因テ毛
 利元俱守山城ニ命シ。其采邑ニ元重ヲ遣ハ
 シテ所置セシム。元俱ハ元重ノ男ナリ。命
 ヲ聽テ直ニ自ラ元重ノ邸ニ抵リ。之ニ告

ケテ曰ク。先公終ニ臨テ卿ヲ勘當シ。余ニ
 預クルヲ遺言スト。今日其命ヲ奉承ス。余
 卿カ材ヲ愛シ。且其無實ヲ憫ム。而レ氏之
 ヲ陳謝スレハ不敬ニ涉ルヲ以テ陳スル
 ヲ獲ス。卿暫ク余カ采邑ニ赴ケ。余應ニ卿
 ニ代テ陳謝スヘシ。若事諧ハスシテ死ヲ
 賜フニ至ラハ。使札ヲ以テ之ヲ報セン。元
 重曰ク。謹テ命ノ辱ヲ拜ス。公ハ貴胄ナリ。
 命スル所アル某ヲ召スヘシ。而ルニ駕ヲ

敬居ニ在ク。某カ榮大ナリ。監吏一人ヲ賜
 ハ、割腹スヘキノミト。七日乃チ家族僕
 從廿八人ヲ率井。元俱ノ領内熊毛郡清尾
 村ニ抵ル。十日元俱家從作間隼人ヲシテ
 死ヲ賜フヲ報セシム。元俱ノ留守等命ヲ
 傳ントス。元重カ拒ンヲ慮ル。家宰村上惣
 兵衛曰ク。隼人命ヲ傳ヘヨ。某太兵衛カ顔
 ヲ窺ヒ。拒ムノ色アル乃チ太兵衛ヲ抱カ
 ン。卿等直チニ二人ヲ斫レト。翌日惣兵衛

隼人等健士廿餘人ヲ率井。元重カ寓居ニ
 至リ。惣兵衛等四人元重ニ面シ。死ヲ賜フ
 ノ奉書并ニ元俱ノ書翰ヲ附ス。元重之ヲ
 見ル。惣兵衛云フ。事公旨ニ出ルモ死ニ遺
 憾アラハ某請フ耦刺セン。某陪臣ト雖モ
 某カ父市即右衛門清之元就公ノ命ヲ以テ元政
 ノ家宰トナル。敵スルニ不足ト云フコト
 勿レ。元重感謝シテ曰ク。若シ組頭ヲ差遣
 セラレハ鬪死セント期セリ。而ルニ城州

公ノ懇志及ヒ御等ノ芳意ヲ辱リス。何シ
 ソ暴舉セント。請文及ヒ元俱ノ答書ヲ作
 リ。内ニ入テ妻子五人ヲ刺殺シ。坐ニ還リ。
 言フテ曰ク。某カ通稱太兵衛。今腹ヲ太字
 ニ割セン。則左手刀ヲ取テ一字ヲ畫シ。刀
 ヲ右手ニ附シテ人字ヲ作り。字形イカン
 ヲ問フ。惣兵衛等答言フ。其ノ勢恰モ筆ヲ
 以テスルカ如シ。元重微笑シ云フ。點ヲ加
 ヘテ畫ヲ終ヘント。臍下ニ刀ヲ刺ン。了テ

吭ヲ斷テ死ス。元重肥皙。姿容ニ美ニシテ。
 武技能セサル所ナシ。尤雜刀ニ長ス。其ノ
 死ヲ賜フ何ノ故ヲ知ラス。或ハ云フ。元重
 ノ能ヲ妬ム者輝元ニ構陷スルニ其仕女
 ニ通スルヲ以テシテ之ニ及ヘリト。毛利家譜
 村上元重是ヨリ先キ慶長五年輝元移封以
 重事來或ハ床第ノ詬リヲ以テ或ハ典
 刑ヲ犯スヲ以テ死ヲ賜フ者少ナカラス。
 而シテ徒容自裁人ヲシテ感セシムル者
 元重及ヒ野藤内景重ア九月廿一日吉
 ルノミ故ニ特ニ標出セリ。

川廣家卒ス。系圖三是歲兩國檢地成ル本

山形縣史 卷之三 博古堂藏

國ヲ三十七萬三千四十石八斗八升二合

トス。檢地帳。役人帳。無
畫集。熊野家譜。

紀元五百九十六年

三年齋藤等頃没ス。八十等頃號ハ李齋出

雲國富田ノ人ナリ。父ヲ等閑ト云フ。僧雪

舟ノ弟子ニシテ。名ハ永門。號ヲ雪溪ト云

フ。等頃父業ヲ繼テ天正年中吉川氏ニ仕

フ。子孫畫ヲ以テ業トス。齋藤家系

紀元五百九十五年

明正天皇寛永七年五月佐波郡三田尻船廠

ハ波戸ヲ築ク。郡方年表
山崎漫筆

紀元五百九十四年

九年安藝大竹土人鼻操川ニ石垣ヲ築ク。

コレヨリ川口埋リテ河水我和木村ニ入

リ河トナル。コレヲ今川ト称ス。和木村民

之ヲ論スルト雖モ聽カス。政珂
郡誌

紀元五百九十二年

十一年秀就幕府ニ毛利就隆ヲ藩屏ニ列

セシメテ允サレシム。

紀元五百九十年

十五年六月毛利就隆始メテ降松ニ入ル。

三末年表。末家岩
國事。福間家譜。

紀元五百八十八年

後光明天皇慶安元年二月十三日氷上山恒

例妙見會ノ童舞ヲ廢シ始メテ能ヲ興行

ス^{札棟}六月十五日毛利就隆降松ヨリ野上

村ニ移住ス^{有故雜文新撰}

三年八月二日佐波郡ノ内東大寺ノ所領

地ヲ收メ米三百石及ヒ其代官屋敷料ト

シテ米五十石ヲ大坂ニテ交附スヘキヲ

東大寺ニ約ス^{東大寺事}

承應元年都濃郡野上村ヲ德山ト改ム^{三末}

表年

紀元千三百年

紀元千三百五年

後西院天皇明曆二年正月十八日山口令八

幡宮境内地ニ井ヲ穿キテ古銀判十枚ヲ

獲夕リ^{長防古器考}

三年三月是ヨリ先キ承應三年十二月大

島郡戸津ノ中浦ニ死鯨漂著ス熊毛郡室

積ノ漁人初メ之ヲ洋中ニ認ム追テ中浦

ニ至リ之ヲ取ラントス土人與ヘス遂ニ

相争フテ止マス因テ客年四月郡奉行兒

玉就重^{傳右衛門}室積ニ出張シテ之ヲ裁判ス

紀元千三百七年

コ、ニ至テ魚價ヲ折半シテ各之ニ與フ。

大記

紀元三百年

萬治元年二月廿一日佐波郡三田尻本町

火アリ七戸十船廠ニ及フ關船十五隻運古

火事閏十二月廿二日夜山口東西後河原

町西ハ窪小路錢湯小路立小路皮屋町現

此町名堂前町相物小路立賣町松木町坊端

失ス正寺及ヒ中市十戸火ク災ニ罹ル戸數

寺二宇死一人一人ナリ當時山口屋敷總計一千五百餘ナリト云フ同上

紀元三百年

二年五月都濃郡洪水大記九月十六日佐

波郡高須町火アリ二十戸

寛文二年四月九日山口驛ニ駄馬寡少ナ

ルヲ以テ紺屋灰運上銀ヲ無利息ニシテ

畜養者ニ貸シ元銀ヲ往キ四箇年間ニ返

納セシム大記六月玖珂郡和木村ノ莊屋

加屋又蔵安藝大竹村ト争ヒ其侵掠スル

所ノ海境ヲ回復ス是ヨリ先キ大竹和木

ノ小村ナルヲ侮リ毎ニ境ヲ侵シ漁利ヲ

紀元三百年

妨碍ス。又蔵之ヲ慨シ境界ノ事ニ盡カス。
 功ヲ以テ客年莊屋トナリ。益意ヲ海境回
 復ニ注ク。村民又蔵ノ約束ニ從ハン。丁ヲ
 乞フ者五十七人。本月八日貝ヲ裝束濱ニ
 取ルヲ大竹ニ報ス。大竹ノ者百餘人來リ
 妨ク。又蔵衆ヲ督シテ之ヲ走ラス。十三日
 又鬪フテ之ニ捷キ。海境ヲ復ス。茲後時々
來リ襲フトイヘ氏一回又蔵寶永九年死
モ敗レシトナシト云フス。墓ヲ裝束濱ニ築ク。濱ヲ字シテ石塔濱

紀元三百年

ト云フ。和木大竹第論一
 事記錄玖珂郡誌

靈元天皇延寶元年六月吉川廣嘉岩國川ニ
 橋ヲ架ス。廿八日經始シ。十月十三日ニ至
 テ落成ス。長百廿間名ツケテ錦帶橋ト云
 フ。岩國川此地ニ至テ錦川ト字スルヲ以
 テナリ。玖珂郡誌
 七年八月八日毛利就隆江戸ニ卒ス。系圖
 三末
 天和二年十月廿九日山口錢湯小路火ア

紀元三百年

紀元三百年

紀元三五三年

リ三十九古來火戸事記

三年五月廿二日宇佐川繁房半兵衛繁昌新六

木村二郎右衛門ヲ玖珂郡山代ノ金山谷

ニ所殺シ父讎ヲ復ス是ヨリ先キ正保二

年四月十二日繁房等カ祖父弘氏九郎九衛門

二郎右衛門カ父莊屋木村與三右衛門ト

所務ノ事ヲ宇佐村ニ論ス與三右衛門及

ヒ其弟二郎兵衛畔頭三郎右衛門弘氏父

子カ大原村ニ歸ルヲ道立野ニ要撃ス弘

氏父子之ト闘ヒ與三右衛門等ヲ殺ス弘

氏カ嫡男弘次内吉死シ二男弘俊内作傷ツク

弘氏私闘人ヲ害スルヲ以テ切腹ニ處ス

寛文八年四月五日二郎右衛門其弟吉兵

衛二郎兵衛カ子茂左衛門及ヒ僕一人ヲ

率井弘俊ヲ襲殺ス因テ二郎右衛門ヲ追

放ス二郎右衛門歸國シ金山谷ニ潛居ス

繁房等之ヲ覺リ讎ヲ報セントス會二郎

右衛門カ子小三郎安藝ニ赴ク繁昌之ヲ

山形縣史略

知テ是日兄繁房ト小三郎カ歸ルヲ要シ
 誘テ我家ニ還リ小三郎ヲ饗シ其ノ麁衣
 ヲ服スルヲ以テ締衣袴帶及ヒ套衣ヲ與
 ヘ父二郎右衛門ニ遣ハスノ書ヲ作ラシ
 ム已ニシテ繁房兄弟小三郎ヲ挾ミ曰ク
 汝ヲ斫殺ス以テ鬪フヘシト小三郎刀擲
 ヲ握ル繁房等其ノ敵スルヲ待タスシテ
 之ヲ斫リ直ニ金山谷ニ至ル從者若干人
 ヲシテ小銃ヲ携ヘシム先ツ僕一人ヲ馳

寛文五年

セ小三郎ノ書ヲ送り途中腹痛スルヲ告
 ク二郎右衛門其ノ書ヲ讀ム兄弟室内ニ
 突入シ報讎ヲ呼ハリテ二郎右衛門ヲ斫
 殺セリ繁房兄弟罪ヲ獲テ追放セラル蓋
 シ誘テ小三郎ヲ殺シ且僕從ヲ率井小銃
 ヲ携フルヲ以テナリ後繁房ヲ宥メテ舊
 祿ヲ與フ

無盡集宇佐川家譜没
 收家節帳目付所日帳

ク長五山崎
 十間漫筆

紀元三百五十年

三年防長押檢地成ル。本國現檢高四十五萬七百九石七斗八合トナレリ。徳山岩國ハ舊檢高

十檢地

紀元三百五十九年

東山天皇元祿二年都濃郡平田開作成ル。

下地

申上

紀元三百五十九年

十二年三田尻ニ塩田ヲ開ク。後之ヲ古濱

ト称ス。風土註進案

紀元三百六十年

十三年九月三田尻ニ波戸ヲ築ク。長三百九十三間

山崎漫筆

紀元三百六十六年

寶永三年安藝大竹土人大竹川中流ニ石

垣ヲ築ク。

玳瑁邸誌

紀元三百六十九年

六年三月八日都濃郡徳山火ク。千三百戸餘寺二宇

波邊年表

紀元三百七十年

中御門天皇寶永七年二月大島郡父賀浦火

アリ。九月三日山口常榮寺火ク。

本寺ハ毛利隆元ノ香華所ニテモト安藝

郡山城ニアリ。國清寺住職立雪惠心ヲ開

山トス。正親町天皇常榮廣利禪寺ノ勅額

ヲ賜フ。輝元安藝ヨリ本國ニ徙ルニ及テ
國清寺ヲ改メテ常榮寺トセリ。寺社證文
風土註進

紀三千百十五年

正徳元年十二月十日。玖珂郡錦見火ク。戸百

餘。又吉敷郡秋穂村火アリ。餘百戸
年渡邊

紀三千百十二年

二年八月九日。都濃郡大風雨。山崎
漫筆九月十

九日。吉敷郡仁壁神社火ク。風土註
進案

紀三千百十三年

三年二月二日。大島宰判ヲ廢シ。上關宰判

ニ合セ。花岡宰判ノ内鹿野大潮二村ヲ割

テ山代宰判ニ隸シ。小郡宰判ヲ廢シテ。山

口及ヒ船木宰判ニ隸ス。帳役人

紀三千百十五年

五年三月二日。山口火ク。二百十
戸餘
年渡邊十八

日。大島宰判及ヒ鹿野大潮二村ヲ舊ニ復

ス。帳役人

紀三千百十五年

享保元年三月七日。三田尻船廠ノ巨船三

隻火ク。年渡邊四月十三日。幕府毛利元次ヲ

廢シ。出羽新庄ノ戸澤政庸ニ預ケ。其男百

二郎三次郎ヲ吉元ニ預ケ。元次ノ遺領ヲ

吉元ニ還附ス。還附一 事記録七月十一日吉元徳

山ニ代官ヲ置キ元次ノ舊領ヲ管セシメ

徳山宰判ト名ツク。帳役人九月三日小郡宰

判ヲ復ス。上同十二月元次ノ遺臣九人ヲ流

ニ處ス。三末 年表

三年岩國領ノ農民一千四百餘人黨ヲ結

七款ニ出訴セント都濃郡ニ出奔シ花岡

ニ此ス。

四年五月廿八日是ヨリ先キ吉元幕府ニ

紀元三百十九年

紀元三百十八年

毛利元次ノ罪ヲ宥メテ隱居トシ男百二
 郎ニ家名ヲ襲カシメシメテ請フコトニ
 至テ幕府之ヲ聽ス元次今井谷ノ舊邸ニ
 還ル吉元百二郎ニ元次ノ舊領ヲ與フ徳
 山宰判ヲ廢ス八月二日百二郎款ヨリ徳
 山ニ入ル後元服シテ元堯ト名ツク。系圖 役人

帳渡邊 年表

五年仁壁神社ヲ造營ス。風土註 進案

六年三月朔日是ヨリ先キ吉川經永領内

紀元三百十年

紀元三百十年

紀元千三百五年
紀元千三百六年

出走ノ農民ヲ諭ストイハ氏聽カス。是ニ於テ吉元ノ命ヲ以テ口羽元之孺等ヲヨリ岩國ニ至リテ裁斷シ。容年正月廿五日ヲ以テ首唱八十三人ヲ執ニ送リ。其餘ハ郷里ニ還ラシム。茲日張本八人ヲ斬ニ處ス。

口羽家譜

十年佐波郡鯖川ニ橋梁ヲ假設ス。渡邊年表

十一年十一月五日。徳山中間町火アリ。百

戸

紀元千三百十七年

十二年九月廿七日。河野通文没ス。六十歲通

文字養哲佐波郡三田尻船手方河野某ノ二男ナリ。出テ他氏ヲ襲ク。水軍ノ役ヲ受ク。長スルニ及ンテ樂マス。乃チ夜竊ニ讀書ス。人トナリ伉俠自ラ喜フ。蘆潔汚レス。遂ニ籍ヲ人ニ附シ還リ去テ醫トナル。亦屑トセス。則其ノ居宅ヲ塾ニシ。刀圭ノ贏ヲ傾ケテ經費ニ給シ以テ子弟業ヲ請フ者ヲ延ク。一ノ才俊業ヲ勤ムル者ヲ得レ

ハ喜シテ食ヲ忘ル之ヲ視ル子ノ如シ
第子日ニ益進ム高第陸續學館ニ擢補セ
ラル人ノ急ニ趨ク丁同室ノ如シ郷黨皆
父兄ヲ畏レス唯養哲ヲ畏ル享保四年代
官養哲ノ賢ヲ以テ聞ス當職桂廣保能登延
見シ問フテ曰ク子亦欲スル所アル歟對
曰ク無シ一揖シテ出ツ其ノ亢簡如此廣
保為メニ其ノ居宅ノ僑ヲ除ク養哲終身
娶ラス子ナシ門人ニ遺囑シ官ニ告ケテ

紀年三百八年

居宅ヲ習業ノ所ト為シ若シ請フ所ヲ得
サル之ヲ火ケ以テ親戚ニ貸スル丁無カ
レト官其義ヲ高トシ志ヲ終ヘシム越氏
塾ト名ツク河野氏本氏越智タルヲ以テ
ナリ周南文集越氏塾由來
十三年五月廿七日佐波川洪水沿岸諸村
多ク害ヲ被ル藤木村ノ農甚右衛門カ家
崩レ老母將ニ溺レントス甚右衛門カ妻
居常善ク姑ニ仕フ之ヲ見テ抱ク所ノ幼

兒ヲ捨テ姑ヲ救フ。水退ソクニ及ンテ還ルニ。崩屋中吼々ノ聲ヲ聞ク。乃チ屋ヲ穿テ之ヲ出ス。兒更ニ恙ナシ。人以此至孝ノ感スル所ナリトス。代官以此聞ス。米二石ヲ與テ之ヲ褒賞ス。賞書是年東大寺交附米ヲ改メテ四百石。高千石ノトシ其ノ内六十五石ヲ運送料諸寺社寄附料候人及ヒ中間ノ恩給ニ除キ。其ノ餘ノ三百三十五石ヲ交附ス。キヲ約ス。東大寺事

紀元二千九百九十二年

十七年。岩國川西町火アリ。

紀元二千九百九十三年

十八年。冬。都濃郡降松火アリ。餘百戸

紀元二千四百五年

櫻町天皇延享二年二月。吉敷郡阿智須浦火

アリ。餘百戸 渡邊 年表

紀元二千四百六年

三年二月。熊毛郡三井村ノ農與左衛門米百石ヲ獻ス。初メ與左衛門ノ之ヲ獻セントスル。郡吏先例ナキヲ以テ元居米ニセシム。論ス。與左衛門曰ク。某ノ父某ニ讓ルニ田畠四町餘ヲ以テス。某耕耘怠ラス

シテ之ヲ倍シ。既ニ二子ニ分與セリ。今官ニ獻セント欲スルハ其贏餘ナリ。之ヲ元居ニスル。利息ヲ兒等ニ賜フヘシ。彼等之ヲ受ル。農事ニ怠ルヘシト。是ニ於テ郡吏以テ聞ス。官其志ヲ感シ。特ニ之ヲ允シ。後年ニ至リ二子カ家若シ困窮セハ救助スル所アラント諭ス。賞答書拔是年佐波郡出雲神社火ク。

紀元二百七年

桃園天皇延享四年二月晦日。山代宰判ヲ分

チテ前奥ノ二宰判トス。役人帳

紀元二百十年

寛延三年。出雲神社ヲ再建ス。

紀元二百十二年

寶曆二年十一月九日。安藝大竹村民和木

村ヲ侵ス。政珣郡誌

紀元二百十五年

十年十一月。吉敷郡長野村石工仁兵衛米四石ヲ獻ス。之ヲ賞シテ銀百目ヲ賜フ。是ヨリ先キ元文四年山口町ニ棄兒アリ。仁兵衛之ヲ舉ク。官其ノ養育料トシテ米二俵ヲ與フ。仁兵衛其ノ米ヲ以テ田地ヲ購

七、其ノ加調米ヲ頼母子銀トシ、本年米四石ヲ獲ル。此米タルモト恩賜ニ生スルヲ以テ、之ヲ獻シ、且彼ノ田地ヲ沽却セサル限ハ、毎歲獲ル所ノ加調米ヲ積テ十年ノ後ニ至リ、又獻スル所アラシク願フ、官之ヲ允シテ、此賞アリ、其ノ獻スル所ノ米ハ山口代官所ノ修補米トス。賞書 拔

十三年吉敷郡山口火アリ。渡邊年表

後櫻町天皇明和四年三月、是ヨリ先キ享保

紀元千四百廿三年

紀元千四百廿七年

十五年十二月、佐波郡田島ニ塩田ヲ開ク。風土註 是

コ、ニ至テ成ル大濱ト名ツク。進索

年、徳山町磯部某カ妻三男児ヲ生ム。

五年七月十七日、大濱鶴濱ノ塩田成リシヲ以テ、三田尻及ヒ小郡宰判ノ地ヲ割キ、中、關宰判ヲ置ク。役人 帳

七年七月十一日、岩國洪水。山崎漫筆 九月、和木大竹境界ヲ論ス。玖珂郡誌 十二月廿七日、佐波郡島地村火アリ。二百十九戸、山崎漫筆 馬一疋焚死、漫筆

紀元千四百廿八年

紀元千四百三十三年

紀元四百廿一年 後桃園天皇明和八年八月廿四日 郡大

品 火アリ。戸百一同九月六日。大島郡牛

島 明治九年熊火アリ。六百十同十月。和木大

竹境界論平ラク。廿四日。定約書ヲ交換ス。

政珩 郡誌 安永三年九月朔日。都濃郡鹿野大潮ノ二

紀元四百廿四年 村ヲ前山代宰判ニ隸ス。役人

五年十月十三日。前奥ノ山代宰判ヲ合セ

紀元四百廿六年 テ一ト爲ス。同是歲佐波郡勝間浦ニ開作

ス 風土註 進案

紀元四百廿八年 七年七月十一日。岩國洪水。渡邊年表

紀元四百廿二年 光格天皇天明二年九月四日。大島郡安下莊

火アリ。社寺各一宇。漫筆

紀元四百廿三年 三年五月十三日。重就款ヨリ三田尻ノ別

業ニ徙居ス。渡邊年表

紀元四百廿五年 五年正月九日。大島郡佐合島。明治九年熊火アリ。戸百二漫筆夏重就涼臺ヲ桑山ニ

起ス。地中古器若干品ヲ獲タリ。石匣ヲ作

リテ之ヲ藏メ。小祠ヲ建立シテ若宮ト云

フ。當時又米皇子ノ殞地タルヲ知ラ。石廻
ス唯認メテ古昔貴紳ノ墳墓トス。銘風

進士註

紀元四百九年

寛政元年二月十六日。周防洋颶風。漫山嶺四

月十三日。佐波郡宮市火アリ。戸數詳十ヲ

リ出火。立市中。市本市焼失。

紀元四百五十年

三年六月十五日。安藝大竹村民來リ和木

村ノ河隄ヲ壞ツ。和木村民之ト鬪フ。大和木

事記録

紀元四百五十二年

五年。佐波郡堀村鎮坐出雲神社ノ式内號

ヲ停メ。同郡右田村堂岡ノ出雲神社ヲ式

内社トス。明治改正風土註進案

紀元四百五十四年

十二年。都濃郡擲濱ノ商村喜右衛門ニ永

世苗字帶刀ヲ許ス。喜右衛門客年乾魚ヲ

長崎ニ鬻ク。適和蘭國船港中ニ沈没ス。蘭

人抜クヲ能ハス。遂ニ長崎奉行ニ依頼ス。

奉行朝比奈昌始河内守榜文ヲ掲ケ。其人ヲ

募ル。喜右衛門巧思アリ。募ニ應シテ之ヲ

浮々蘭人酒肴ヲ贈リ。明年復々砂糖廿五箱ヲ贈ル。奉行銀三十枚ヲ以テ之ヲ賞ス。事幕府ニ達ス。老中松平伊豆守奉書シテ旭日章ノ船旗ヲ下賜ス。因テ此賞アリト

云フ。新撰 雜彙

紀元千四百五十年

享和元年三月。義奴六松ニ月俸ヲ賜フ。六松ハ玖珂郡指川村ハ三右衛門カ奴ナリ。幼ニシテ父ヲ亡フ。三右衛門之ヲ憫ミ六松母子ヲ収養ス。後三右衛門カ家産落ツ。

六松獨力主家五人ヲ鞠シ。艱苦數年。遂ニ主家ノ土田ヲ復ス。邑人皆六松ノ義ヲ感ス。子ナキ者女ヲ以テ之ニ娶ハセ。其家産ヲ讓ラントスルアリ。三右衛門モ亦六松ノ功ヲ報スルヲ能ハサルヲ憂ヒ。其請ヲ幸トス。六松肯セシテ曰ク。我アラスンハ主家父シキヲ得ス。我固ヨリ一世ニシテ足ル。奕世ノ主家ヲシテ斷絶セシムルカ如キハ不忠ナリ。主家全キヲ得ハ主家



紀元四百二十二年

豈我ヲ棄ンヤ。婦ヲ娶ルハ願フ所ニ非ラ
 スト。遂ニ聽カス。是ニ至テ此賞アリ。六松
 優游年ヲ經。文化十三年正月年八十三歳
 ニシテ没スト云フ。賞譽書拔義奴碑
 風土註進案
 二年七月。防藝ノ國界ヲ定ム。是ヨリ先キ
 元年三月。大竹村民來リ和木村民ノ漁獵
 ヲ妨ケ。一人ヲ傷ツケ。六月十一日古川ノ
 流ヲ塞ク。是ニ於テ大竹川ノ水暴漲シ和
 木村ノ今川ニ注キ。沿流ノ田ヲ崩壞ス。吉

紀元四百二十二年

川經倫之ヲ藝藩ニ告ク。應セス。因テ齊房
 ニ訴フ。齊房吉田某八右衛門ヲ安藝ニ差遣シ
 境界ヲ論ス。是ニ至テ大竹川ノ支流和木
 村ノ今川。大竹村ノ古川ヲ塞キ。大竹川ノ
 中央ヲ以テ國界トス。和木大竹爭論一
 件記錄玖珂郡誌
 文化五年九月十四日。片山則鳳没ス。六十九歳
 則字順甫。吉敷郡吉敷村ノ人。鳳鳳ト號ス。
 毛利ノ譜代ナリ。儒學ヲ以テ寛政
 三年藩士ニ擢ラル。人トナリ耿介特立直

方ヲ以テ自ラ居ル。權貴ニ屈セス。屢上書

時弊ヲ論ス。遂ニ言事ヲ以テ罪ヲ獲。郷里

ニ歸リ隱居ス。コ、ニ至テ没ス。分限帳 鳳翽集

紀元四百五十四年

十一年二月十六日。山口常榮寺火ク。傳寺

紀元四百五十五年

仁孝天皇文政七年二月廿四日。是ヨリ先キ
佐波郡西浦ニ開作ス。コ、ニ至テ成ル。風土

註進

紀元四百五十七年

十年九月十一日。玖珂郡山代本郷火アリ。

勘場及七寺社民屋
合計百四十九宇。
渡邊年表

紀元四百五十八年

十一年正月廿三日。是ヨリ先キ佐波郡佐

野村ノ遠崎ニ開作ス。コ、ニ至テ成ル。上同

二月十四日。熊毛郡岩見島祝島ノ火アリ。

三百十
六戸是年。山口寶現靈社ヲ多賀神社

ノ東南數歩ノ地ニ移ス。社傳

紀元四百五十九年

十二年正月九日。大島郡久賀浦火アリ。百四

五十七戸。焚
死十五人。
渡邊年表

紀元四百六十年

天保二年六月五日。大島郡大雨洪水。戸田

村ノ山崩潰。民屋ヲ倒シ。人畜ヲ壓殺ス。十四

四戸、死六、十同七月廿七日、三田尻宰判
五人、牛九頭、上

ノ農民蜂起シ、中、關濱方ノ商石見屋嘉右衛門ノ居宅ヲ撞破シ、其他ニ及フ。此事ノ起ル前一日嘉右衛門及ト同村ノ上屋儀兵衛、欵ヨリ還ル。吉敷郡小鯖村ヲ過ク。村人嘉右衛門力駄荷中ニ皮革アラシメテ詰ル。當時禾穀收穫セサル前ハ、村人牛馬ノ皮革ヲ運搬スルヲ停ムルヲ以テ例トシ、路傍ニ廬舎ヲ假設シ之ヲ點檢ス。嘉右衛

門、籃輿中朝鮮犬ノ皮褥ヲ敷ク。之ヲ出シ其ノ半折ヲ駄荷中ニ入ル。他ハ更ニアルヲナシト答フ。茲時村人群至ス。一人云フ。駄荷中ノ皮ヲ出シ、村人ニ酒ヲ賒ラハ調停スヘシト。嘉右衛門之ニ依頼ス。彼又云フ。村店ニ赴キ居テ決議スルヲ俟ツヘシト。嘉右衛門等將ニ村店ニ赴カントス。衆之ヲ逃亡スルト誤認シテ叫フ者アリ。是ニ於テ衆人嘉右衛門等ヲ地上ニ撲壓シ。

遂ニ之ヲ縛シ。本日ニ至リ。郡界鯖山峠ニ
 上リ退放セントスルニ。三田尻宰判ノ者
 來リ會シテ伊佐江村ニ赴キ。光宗寺ノ松
 樹ニ嘉右衛門等ヲ釣下シテ打擲シ。終ニ
 中。關ニ抵リ。市街ヲ巡肆シテ其居宅ヲ撞
 破シ。勢ニ乘シテ其他ニ及ヘリ。嘉右衛門
 等纔ニ身ヲ以テ免ル。ト云フ。廿八日。黨
 徒益加ハリ。朶山ニ會シテ。仁井令村槐原
 某カ宅ヲ毀ツ。廿九日。佐野官市及ヒ吉敷

郡ノ壇等ヲ亂ル。茲夜。吉敷郡仁保郷ニ入
 リ。黨與ヲ募リ。八月朔日。山口ニ出テ。市街
 及ヒ湯田矢原等ノ豪富ヲ撞破シ。器財ヲ
 焚毀ス。二日。吉田代官林某郎ハ款ヨリ至
 リ説諭ス。某民心ヲ得ルコヽニ於テ事終
 ニ止ム。仕置帳廿二日。吉敷郡小郡宰判ノ農
 一揆シ。嘉川江崎深溝等ノ豪家ヲ撞破ス。
 上同 九月廿七日。玖珂郡高森ノ農蜂起ス。上同
 十月七日。熊毛郡岩田村騷擾ス。上同 十一月

紀元五百一十年

二日高森再ヒ蜂起ス。四日ニ至テ鎮靜セリ。
上同

七年二月廿日岩國藏本火ク。
渡邊年表三月十

六日都濃郡福川村火アリ。
百四十戸上同四月

廿七日幕府毛利廣鎮ヲ城主格ニ班シ高

増ト爲ス。
三末年表

十二年二月十三日氷上山恒例妙見會ノ

能ヲ廢シ始メテ舞樂ヲ行フ。
是年都

濃郡長穗村龍文寺火ク。

紀元二千五百五年

弘化二年十一月十一日矢野淳市没ス。
六

淳字子淳三田尻ノ人ナリ。笈山ト號ス。

畫ヲ能クス。門人ニ林靖真釋公壽アリ。公

壽半雲ト號ス。同所真宗光明寺ノ住職ナ

リ。
無給帳
真蹟

紀元二千五百三年

孝明天皇嘉永六年十二月八日上田右續明

門衛没ス。
八十歳續明字恭述山口ノ人ナリ。鳳

陽ト號ス。學和漢ヲ兼ネ。尤國典ニ精シ。續

明山口ノ地ニ學校ナキヲ慨シ。講習堂ヲ

紀二千五百六年

創ス藩主嘉賞シ國學ニ準シ書籍ヲ賜フ。
 後ニ周防明倫館ト改称セリ。上田續明墓碑
 安政三年八月十一日山口築山ノ松樹ニ
 霹靂ス。大内氏遺愛ノ古松ナリ。月見松ト号ス。一名管絃松。樹心空洞トナレ
ルニ雷火入り。樹梢ノ節隙ヨリ烟焰ヲ噴出ス。土人カヲ合セ。淫土ヲ背負シテ樹上ニ躋チ。火口ヲ塗塞ス。翌日ニ至リ。他ノ節隙ヨリ又火ヲ發ス。之ヲ救フトイヘ。氏滅セス。遂ニ十四日伐テ之ヲ倒ス。樹根猶火ヲ發ス。十九日ニ至リ。樹根盡キテ自ラ止ムト。
今八幡宮扁額十二月十八日岩政信比古要没ス。六十信比古ハ玖珂郡新庄村

紀二千五百六年

ノ豪農ナリ。國學ヲ以テ聞ユ。見聞誌
 五年五月僧月性没ス。四十月性字ハ知圓。清狂ト號ス。大島郡遠崎村真宗明圓寺ノ住職ナリ。年甫十五肥豐ノ間ニ遊學シ。又京畿ニ往來シ。常毛三越ニ遊ヒ。名士ト相唱酬スル者十餘年。詩名大ニ興ル。而シテ月性常ニ外寇ヲ以テ憂ト爲ス。嘗テ西蕃紀傳ヲ讀ミ。葡人匪教ヲ以テ呶哇ヲ誘キ。遂ニ其國ヲ奪フニ至リ。慨然以謂ク彼ノ

呱哇ニ施ス所ノ者ヲ以テ來リ我ニ施サ
ハ則其患タル細ニアラス彼既ニ教ヲ以
テ民ヲ誘ケハ我モ亦教ヲ以テ民ヲ結ハ
サルヘカラスト是ヨリ法ヲ講スル此意
ヲ申説ス忠悃懇到聲淚共ニ下ル聽者感
激群集常ニ堂宇ニ滿シ藩老益田親施正
後右衛門福原元偲後越及ヒ浦元襄鞞尤モ
之ヲ愛シ數延見シテ縱談セシメ且其ノ
采邑ニ遣ハシテ講説セシム是ニ於テ月

漢子言六事

性ノ名遠近ニ噪シク呼テ海防僧ト云フ
丙辰ノ春本願寺門主召テ京師ニ至ラシ
メ其説ヲ問フ月性乃チ書數千言ヲ作り
之ヲ呈ス門主大ニ之ヲ奇トシ俸銀ヲ給
シ東山ノ別院ニ置ク將ニ用ウル所アラ
ントス京師處士梅田定明源二月性ト親
善一日談紀伊ノ海備ニ及フ月性ニ囑シ
往テ説カシム月性即チ束裝和歌山ニ至
ル藩老久野丹波邀見大ニ其説ヲ悦フ嘆

曰方外ノ人憂念此ノ如シ我輩肉食安ソ
漸サルヲ得ンヤト此時ニ當リ幕府方ニ
蝦夷ヲ經理ス本願寺ニ命シ其徒ヲ差遣
シ居民ヲ誘導セシム月性其撰ニ膺リ將
ニ徃ントス故アリ果サスシテ歸國ス
茲年門主復月性ヲ召ス月性疾篤キニ會
ス遂ニ自ラ其起サルヲ知り顧テ其人ニ
謂曰ク吾狂愚ヲ以テ士大夫ニ從遊シ以
テ虚聲ヲ博スルヲ得ル者ハ皆先妣ノ力

ナリ今將ニ徃テ泉下ニ從ヒ生前不了ノ
奉ヲ竟ントス死何ソ恨ムニ足ラン但朝
家ノ爲メニ外患ヲ除ク能ハス是吾恨ナ
リト短古一篇ヲ作りテ終ル月性狀貌魁
梧頭粟毬ノ如キモ數旬劓セス性豪宕酒
ヲ嗜ミ百金ヲ揮霍シ以テ意ニ介セス人
ト議論スルヤ直遂假借スル所アルナシ
嘗テ藩老某ノ宅ニ詣ル酒間之ニ謂曰ク
君カ家太夕宏敞蓋ソ毀子以テ演武場ト

爲サ、ル。醉ハ則客劍ヲ取り掀舞豪吟。旁
 ニ人無キカ如シ。或ハ少シク其意ニ觸ル
 レハ怒氣激發抑遏スヘカラス。然レ氏義
 ニ趨ル渴スルカ如ク。喜テ人ノ冤枉ヲ洗
 フ。是ヲ以テ人賢不肖トナク皆愛シテ之
 ヲ親ムト云フ。忠節事跡稿 蕭海遺文十月。孝女吉敷
 郡臺道村寡婦石。都濃郡末武下村ノ農宇
 吉祖母政ニ。永名字ヲ許シ。且其高年ヲ勞
 シ。真綿二把ヲ賜フ。石夫ヲ伊八ト云フ。貧

困シテ田畠ヲ沽却シ。長崎ニ遊ヒテ還ラ
 ス。石ヨリ舅姑ニ仕フ。舅姑共ニ足疾アリ
 テ歩行スルヲ能ハス。其ノ往ント欲スル
 所アル。石之ヲ負フテ往ク。數年一日ノ如
 シ。人或ハ離縁ヲ乞ヒ以テ他ニ再嫁セン
 トヲ勸ム。石顧リミス。偶長崎ノ人石カ近
 隣ニ來リ。石カ孝貞ヲ感シ。歸國スルニ及
 ンテ伊八ヲ諭シ家ニ還ラシム。伊八感悟
 シテ歸郷シ。家業ヲ勉勵シテ相共ニ父母

ヲ養胡セリ。文政七年官石カ孝ヲ賞シ。終身足役ヲ除キ。毎歳米一俵ヲ與ヘ。又時々褒賞セリ。政風ニ夫ノ棄ル所トナル。獨身老父母ニ仕ヘ。辛苦ヲ嘗ム。人其ノ貧ヲ憫ミ。金錢ヲ惠メハ。葉ヲ拾ヒ。草ヲ刈リ以テ之ニ報ス。人復婚ヲ迎ヘン。丁ヲ勸ムレハ。夫アル或ハ父母ニ疎ナル。丁アラシク恐ル。父母死セハ。尼トナリ。其ノ冥福ヲ弔スヘシトテ迎ヘス。官屢之ヲ賞シ。遂ニ其宅

前ニ孝女某ト録スル石標ヲ建ツ。後姪ノ子宇吉ヲ養子トス。宇吉亦ヨク政ニ仕フ。コヽニ至テ此賞アリ。石年七十。政年九十。六十リト云フ。賞譽書 拔碑文是年松永祐利周ニ吉敷郡鑄錢司村南原ノ地ヲ與ヘ。藥園ヲ開カシム。南原藥園ニシテ瘠确不毛且北方ニ河アリテ砂礫ヲ流シ。霖雨スル必水患アリ。人更ニ開墾スルナシ。祐利本郡ニ生レ。コノ數十町ノ地ヲ空クスルヲ慨シ。心ヲ樹藝培養ニ注スル。丁多ク。コヽニ至テ實際ニ試験セシヨリ堤塘ヲ請願ス。因テ此命アリ。祐利コレヨリ堤塘ヲ築キテ水患ヲ除

山口縣史 卷之二 博古堂藏

紀二千五百二十年

テキ田園ヲ開キ草種木苗ヲ播殖ス。今ニ至テ牧ニ怠ラス。既ニ當時植ル所ノ樹木其ノ屋ヲ覆フアリ。祐利本ノ六十歳ナリト云フ。

萬延元年七月弘正方平五没ス。二五歳。正方

ハ三田尻ノ人ナリ。國學ニ長シ。歌詞ヲ能

クス。晩年京師ノ邸吏トナリテ役中ニ終

ル。長柄山風松廼藤靡等ノ著アリ。無給帳遺稿

文久三年四月廿二日。常榮寺住職祖溟暗

殺セラル。祖溟號ハ韶陽。筑前ノ人ナリ。人

トナリ敏慧。其寺祖惠心。元就父子ノ命ヲ

紀二千五百三年

奉シ。天朝及ヒ足利家ニ往來シテ。遂ニ大

照佛智國師ノ榮號ヲ辱クセシ。偉業ヲ繼

クニ意アリ。性容ヲ好ミ之ヲ待ツ甚タ厚

シ。而シテ身ニ奉スル貧寺ノ僧ヨリモ薄

シ。唯淹茶ハ當時藩主トイヘ氏殆及ハサ

ル物ヲ喫セリ。尊攘ノ事起ルニ及ニテ專

ラ有志ノ士ト交ル。其徒京師ニ抵ラント

シテ資ナキ者之ヲ祖溟ニ謀レハ。乃千金

ヲ借シ。衣ヲ與ヘ少シモ吝ムナシ。淨財

之カ爲ノニ盡キ。田園ヲ典賣シテ猶負債
アルニ至ル。人或ハ目シテ安國寺惠瓊ト
ス。祖溟敢テ意トナサス。曰ク。惠瓊モ亦豪
傑ナル哉ト。長井時庸雅樂祖溟ヲ以テ用ウ
ヘキ者トシ。歎接持論ヲ盡ス。祖溟大ニ心
服シ。時庸ニ縁テ其宿志ヲ果サントス。是
ヨリ少壯ノ疎作スル所トナル。時庸ノ死
ヲ賜フヤ。祖溟悔惜シテ萬里ノ長城ヲ壞
ツトス。少壯益之ヲ惡ミ。且ツ祖溟カ或ハ

慶親ニ謁シテ議スル所アラシク恐ル。此
時ニ當リ。斬奸ノ舉盛ニ世ニ行ハル。少壯
之ニ劬ヒ。山口ノ耳目ヲ一洗セント欲ス。
茲日祖溟慶親ノ旅館ニ出テ起居ヲ問フ。
少壯謂フ。我輩カ慮ル所今日ニ在リ。若カ
ス之ヲ殺シテ後患ヲ除キ。且ツ之ヲ以テ
因循ノ徒ヲ激センニハト。其夜館ノ使ト
稱シテ常榮寺ニ抵リ。祖溟ヲ拉テ出之ヲ
寺門外ニ斫殺ス。廿三日。首ヲ後川原ニ梟

シ其罪状ヲ標榜ス。見聞誌七月二日慶親父子勅使ノ下向ヲ以テ山口ニ出ツ。茲夜大風暴雨。四日勅使正親町三条公董宮市ニ來リ次ル。定廣其ノ旅館ニ趨ク。六日勅使吉敷郡ニ入り。氷上山興隆寺ヲ以テ旅館トス。敬親事跡七日吉敷郡鯖山ノ勝坂小郡ノ柳井田等ニ新關ヲ置ク。上同八日慶親父子勅使ニ興隆寺ニ謁シ。勅使ヲ拜戴ス。上同十日勅使赤間關ニ赴ク。上同二十日慶親歿

地ハ邊隅ニシテ尊攘ノ事ニ便ナラサルヲ以テ山口ニ居住スルヲ國內ニ告ク。上同八月十九日。是ヨリ先キ幕吏中根市之丞鈴木八五郎赤間關ニ下リ。攘夷ノ事ヲ按問ス。奇兵隊之ヲ論破シ。且逼テ其軍艦ヲ借ル。中根等揚陸吉敷郡小郡ニ來リ次ル。茲夜人アリ其旅宿ヲ襲ヒ。八五郎及ヒ市之丞ノ從者二人ヲ害ス。市之丞其ノ之ク所ヲ知ラス。或ハ云フ。市之丞丸尾崎ニ抵

リ船ニ乗セシト。忠節事跡稿 九月三日是

ヨリ先キ七月十一日勅使赤間關ヨリ佐

波郡ニ還リ。三田尻ニ滞在ス。コヽニ至テ

九州ニ濟ル。慶親壯士四十三人ヲ陪從セ

シム。敬親事跡 十五日。慶親三田尻ニ抵リ。三條

實美中納言 三條西季知中納言 東父世通禰將

壬生基修修理權大夫 四條隆壽侍從 錦小路頼徳

右馬頭 澤宣嘉正水 ヲ慰問ス。是ヨリ先キ六

月三日。慶親堺町門宿衛ノ命ヲ奉ス。慶親

毛利元純。吉川經幹及ヒ益田親施ヲシテ

之ヲ守ラシム。八月十八日。朝廷俄ニ我ノ

宿衛ヲ罷メ。實美以下十三人ノ入朝ヲ停

ム。元純等變ヲ聞キ馳セ至ル。諸門戒嚴一

介ノ入ルヲ許サス。關白鷹司輔熙ノ第ニ

至リ寛ヲ許フ。輔熙モ亦朝禁ヲ受ケ事端

ヲ悉サス。實美等責罰セラル。尋テ元純等

ニ諭シ衆ヲ勒シテ闕下ヲ退ソキ。恭默命

ヲ埃タシム。元純等方廣寺ニ退ソキ。百方

哀訴ス。許サレズ。乃チ關白ニ上疏シ。歸藩
邊ニ備ヘント請ヒ。其夜衆ヲ舉ケテ西下
ス。實美以下七人禁ヲ脱シ。元統等ト同シ
ク三田尻ニ到ルヲ以テナリ。京師變朝廷

幕府防長人民ノ京師ニ入ルヲ禁ス。

十月二日。澤宜嘉出走ス。藩士南八郎本名

弥一等八人之ニ從フ。尋テ兵ヲ但馬ノ生

野ニ舉ク。幕府出石豐岡姫路等ノ諸藩ニ

命シテ之ヲ討ツ。十四日宣嘉ノ衆潰ユ。八

郎妙見山ニ戰フ。衆寡敵セス。同志皆自殺

ス。八郎其ノ首ヲ介シ。而シテ自刎シテ死

ス。例ニ因レハ八郎等ノ小傳ヲ附スヘシ。

勤王ノ事ニ死ス。爾後國事日々衰遷之カ

為ニ身ヲ殺ス者相踵クヲ以テ。矩方ヨリ

斷シテ節義ニ死スル者ハ別ニ宣嘉復來

奔シ。長門ニ潛匿ス。忠節事十一月七日慶

親款ニ赴ク。十六日還ル。敬親是月癸丑甲

寅以來慶親父子天朝幕府ノ間ニ盡カセ

シ事ヲ陳疏シ。奉勅始末ト名ツケ。井原親

章註ヲ使トシ之ヲ京師ニ上ル上同十二月

十一日奉勅始末ヲ國內ニ頒布ス上同游擊

軍五百人來島政久又兵衛ニ管轄セシメテ

三田尻ニ置キ奇兵隊三百人瀧厚徳彌太郎

赤根武人ヲ總督トシテ赤間關ニ置キ八

幡隊百八堀新五郎駒井忠仲政五郎ヲ總

督トシテ山口ニ置キ集義隊五十人櫻井

新平ヲ總督トシテ小郡ニ置キ義勇隊

五十人佐々木龜之助秋良貞温敦之助ヲ

總督トシテ上關ニ置ク上同

山口縣史略卷第二終

山口縣史略
卷之二

明治十三年七月廿八日板權免許
明治十五年四月出板

定價三錢

著者

山口縣士族

近藤清石

周防國吉敷郡山口
八幡馬場十番地居住

同縣平民

出板人

宮川臣吉

周防國吉敷郡山口
中市町六番地居住

